2014年度　事業報告

概　要

2014 年度は、現在当会が最重点課題として取り組んでいるキリマンジャロ山の国立公園拡大問題（次頁囲み記事参照）において、大きな進展があった一年となりました。

同問題により、キリマンジャロ山ではそれまでの環境保全活動だけでなく、地域住民の生活まで大きく脅かされる事態となりました。当会はこの問題の解決のためには、同山における新たな森林保全･管理の仕組み構築が欠かせないと考えており、それはこれまでの歴史的事実や実績からも、地域が主導し主体となった仕組みであると考えています。そのため、国立公園に編入されたかつての地域住民の生活林（緩衝帯の森“ハーフマイル･フォレスト･ストリップ”。以下“HMFS”と表記）に沿った 37 村（人口増による分割により現在 39 村）で組織する“KIHACONE（Kilimanjaro Half mile forest strip Conservation Network）”を立ち上げ、地域主導による森林の一元管理体制の実現を目指すことにしました。

2014 年度はこの KIHACONE を新たな森林管理体制の実現を目指した「地域代表組織」として、いかに政府に認識させ､またその問題の解決をいかに公的テーブルの上に乗せるかを課題として取り組みました。また HMFS からの国立公園解除後をにらみ、地域による森林の持続的管理・保全の具体的指針作りも取り組み課題として掲げました。

その結果はタンザニアの森林を所轄する天然資源観光省副大臣と KIHACONE 代表らとの初会合、さらには政権与党 CCM（革命党）書記長にこの問題を直接伝え、HMFS 返還に向けた約束の取り付けという大きな成果へと繋がりました。地域住民の声は、ついに中央政府に届くところまで辿り着いたといえます。

村落植林活動

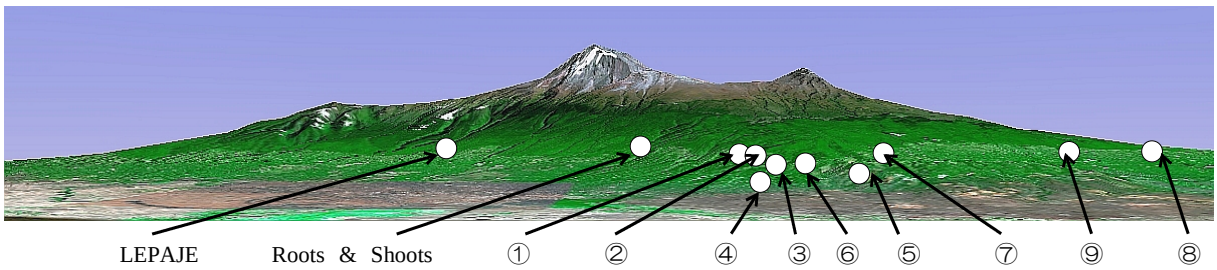
表1【小規模苗畑グループ活動実績】

単位：本

ｸﾞﾙｰﾌﾟ名		村	植　林（ha）	販　売	配　布	枯　死	育苗中	合計(※)	備　考
①	TEACA	Tema	10,456（ 6.54）	1,112	6,955	0	5,335	19,666	
②	Olimo	Tema	3,450 （2.16）	200	915	0	735	4,240	小学校苗畑
③	Fumvuhu	Kidia	1,500 （0.94）	35	945	0	1,600	3,590	小学校苗畑
④	Kidia	Kidia	1,993 （1.25）	21	320	0	420	2,248	女性グループ
⑤	Manu	Manu	1,150 （0.72）	350	600	0	1,100	2,980	小学校苗畑
⑥	Mowo	Mowo	3,000 （1.88）	150	405	0	950	4,505	村人グループ
⑦	Maua	Ruwa	0 （0.00）	0	1,900	0	400	2,300	教会苗畑
⑧	Lole	Lole	480 （0.30）	0	2,470	600	300	3,850	小学校苗畑
⑨	Mshiri	Mshiri	1,520 （0.95）	150	838	260	11	2,779	中学校苗畑
合　計			23,549（14.74）	2,018	15,348	860	10,851	46,158	

※ 前年度の苗木残数を差し引いた当年度の実育苗数、

【図1】 苗畑位置図



ー キリマンジャロ山における国立公園問題 ー

世界遺産でもあるキリマンジャロ山では、過去 100 年間に約３割の森が失われたと言われており、その傾向は現在も続いています。森林保護に対する世界からの圧力もあり、タンザニア政府はその対策に乗り出しましたが、そこで「森林破壊の元凶」とされたのは地域住民でした。2005 年、政府は彼らを森林から排除するため、彼らの生活を支えてきた緩衝帯の森“ハーフマイル･フォレスト･ストリップ”（以下 HMFS）の国立公園への編入を断行しました。

しかし当会は以下の理由から、この政策に反対し HMFS からの国立公園の指定解除を求めています。

（１）森林破壊の元凶は地域住民なのか

現在 HMFS で広大に森林が失われているエリアは、かつて政府が森林プランテーションとして商業伐採を行っていたエリアとほぼ一致しています。これは政府が伐採後に再植林をしなかったためで、地域住民に森林破壊の責を負わせ、その排除によって森林保護の実現を図るとする HMFS の国立公園への編入は、政策としての合理性をまったく欠いています。しかもその裸地化した HMFS に森林を回復するために植林に取り組んできたのは地域の住民たちでした。

（２）森林を守ったのは／守れるのは誰か

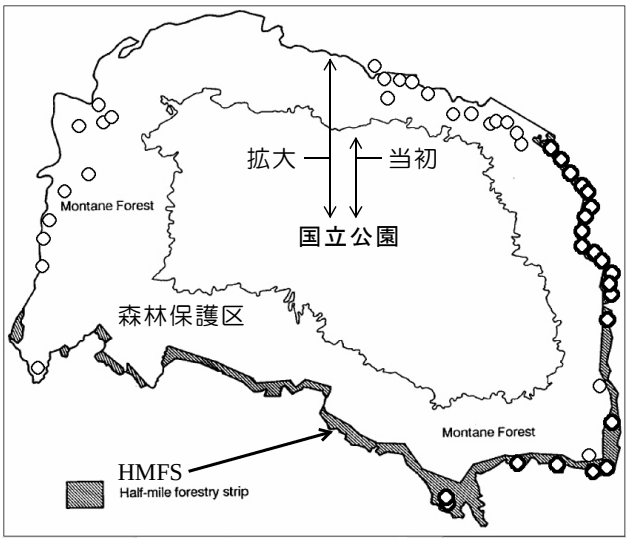
キリマンジャロ山の森林に関する研究は、過去最も HMFS の森が守られていたのは、タンザニアの独立以前、地域住民にその管理が委ねられていた時期であったことを指摘しています。さらに住民利用だけに限られていた HMFS は、プランテーションがあった HMFS に比べ、今でも良く森が残されていることが衛星画像からも確認できます。このことは過去のみならず、現在においても森の最大の守護者が地域住民であることを裏付けています。国立公園化は森を守るどころか、その森から守護者を奪ったに等しい政策だといえます。

（３）誰にも守れない国立公園法

国立公園法は地域住民による資源利用はもとより、森の中に入ることさえ許しません。しかし法によって日々のニーズ（薪、飼料等）が消えるわけではない以上、彼らは生活維持のために森に入り続けるしかありません。一方、国立公園を管理するキリマンジャロ国立公園公社（KINAPA）は、「不法侵入者」である彼らと激しく対立し、徹底排除に乗り出します。しかし住民ニーズが存在する以上、彼らの完全排除は不可能で、この現実に KINAPA は一部で「犯罪行為」に目をつぶり始めます。この時点で既に国立公園法は破綻しています。誰も遵守できない法の下に森を置くことの誤りは明らかであり、またそれによって森林保護が成立する筈もありません。

（４）当会の取り組み

国立公園化は森も人も守ることができない政策であり、当会は HMFS から国立公園を解除した上で、地域が主体となったキリマンジャロ山における新たな森林保全・管理の仕組み作りを、同山の 39 村の連合組織である KIHACONE、そして TEACA とともに目指しています。



【図2】
図中の黒丸印が現在および過去にあった森林プランテーションの位置。これらはキリマンジャロ山で破壊が進んだ森林の位置と一致する。

１．国立公園化問題への対応

設定した課題

(1) 森林管理戦略及び環境保全規則の明確化

キリマンジャロ山の旧 HMFS（8,769ha）のうちもっとも大きな面積（5,120ha）を占めるモシ地方県において、その森林を全体として管理し、保全していくための枠組みと統一的戦略、指針を固める。その準備作業には、2013 年度を通してモシ地方県下の旧 HMFS 沿いにある 37 村の地域横断的協議体組織 KIHACONE が取り組んできたが、そこで示されたベース案の「内容の妥当性」を検証し、また「実施の確実性」と「持続性」を担保する“仕組み”を備えたものとしていく必要がある。これらの点について、KIHACONE 及び 37 村の首長、TEACA と協議し、できるかぎり 2014 年度中に最終案としてまとめることを目指す（最終的に環境保全規則（Sheria Ndogo Ndogo）は各村での村会議の承認を得る必要があり、また戦略、指針は、森林条例の中で明確に位置づけられて初めてその地位が保全されることになり、それらはまたこれからのこととなる）。

【結果】

KIHACONE の代表者委員会で 6 カ月間をかけて、HMFS 返還後をにらんだ新たな森林保全・管理の枠組みをまとめ終えました。

しかしその内容は、タンザニアにおける地域主体による森林管理の先行事例である SULEDO プロジェクト（マニヤラ州キテト県）の枠組みをほぼそのまま蹈襲したものとなっており、必ずしも世界遺産でもあるキリマンジャロ山の実情を反映したものとはなっていませんでした。

従って検証課題とされていた「内容の妥当性」や「実施の確実性」、「持続性」の仕組みともに確保されているとは言い難く、実際に適用された場合、機能しないものとなる可能性が十分にありました。その場合結果的に森林を守ることが出来ないことから、HMFS の国立公園への再編入という最悪の事態を招く恐れがあり、当会からはそのことに対する懸念を強く伝えました。また、枠組みの実効性を確保できるよう、各所にチェック機能と歯止め策を盛り込む必要があることを、KIHACONE の代表者らに対し徹底指導を行いました。

これらを受けて KIHACONE の総会で審議した結果、枠組みはあらためてゼロベースで作り直すこととなり、本課題については次年度へ持ち越しとなりました。

また枠組みの完成を待ってできるだけ各村における新たな環境保全規則（Sheria Ndogo Ndogo）の策定にも着手したい考えでしたが、上記の通り、枠組みの完成が先送りとなったことから、これへの着手も出来ずに終わりました。

設定した課題

(2) KIHACONE の政府認定組織への格上げ

新たな森林管理の枠組みを完成させても、KIHACONE がたんなる任意組織である限り、地域代表としての正当性も、政府との交渉力も持ち得ない。従って 2014 年度は、KIHACONE が中央政府（省庁）もしくは地方政府（県）のいずれかの認定する公認組織として登録されることを目指す。

【結果】

これまで HMFS の国立公園への編入に反対し地域の先導役を果たしてきたのは TEACA ですが、その地位はあくまで 1NGO であり、いくら声を上げても政府はそれを「地域の声」として認めませんでした。

そこでダルエスサラームに本拠を置く環境法令の専門家チーム LEAT（Lawyers' Environmental Action Team）のアドバイスも得て、KIHACONE が 37 村（当時）の地域代表組織として、公的にも位置づけられることを目指しました。

具体的には中央政府ないし地方政府のいずれかにおいて、KIHACONE を政府の認可組織として登録することを目指しました。その結果昨年 7 月、KIHACONE は地方政府（モシ県）認可の CBO（Community Based Organization、地域社会組織）として正式に認可されることとなりました（担当部局は県社会開発局：Maendeleo ya Jamii wilaya ya Moshi）。

これにより KIHACONE の発言は公的にも地域代表としての発言と位置づけられるようになり、また天然資源観光省副大臣等、行政との協議、交渉の場においてもその立場で発言することが可能となりました。

設定した課題

(3) 国会議員への働きかけの強化

国立公園法の改正を視野に入れ、より高次なレベルへと活動を引き上げるために、同法改正の権限を持つ中央政府および国会議員へのアプローチがますます重要となってきており、KIHACONE による直接交渉を目指す。

【結果】

2014 年度は、これまでに関係を築いてきたモシ県選出のシリル・チャミ議員（TLP：労働党、元産業貿易省大臣）及びアウゴスティン・ムレマ議員（CCM：革命党）に加え、モシ県出身で特別枠選出のベティ・ムチャング議員（CCM）とのコンタクトも開始しました。チャミ議員、ムレマ議員には KIHACONE の全体会議には毎回参加を要請し、ムレマ議員の出席は叶いませんでしたが、チャミ議員には数度にわたり会議への出席を得ることができました。

こうした国会議員との関係構築の結果、チャミ議員、ムチャング議員のルートを通して首都ドドマにおいて、KIHACONE 代表団と天然資源観光省マームード･ムギムワ副大臣、マイムナ･タリシ事務次官との会議が実現しました（会議にはチャミ、ムチャングの両議員も参加）。そしてこの会議において、国立公園問題解決のために、天然資源観光省大臣、キリマンジャロ州知事、モシ県知事、KINAPA、KIHACONE、TEACA による 6 者会議の開催が決められましたが、結局ラザロ・ニャランドゥ大臣は KINAPA、州知事の 2 者と会うに留まりました。

しかしこうした国会議員との関係構築の結果は、上記の通り中央政府への足がかりとして確実に結果を出しつつあるといえ、またこの問題の認知のためのカとなってきています。

マームード･ムギムワ副大臣（左から2番目）とKIHACONEの会合の模様

しかし 2014 年度最大の成果は、なんといっても政権与党である CCM のキナナ書記長に、このキリマンジャロ山の国立公園問題を直訴することに成功したことだといえます。これは年末の総選挙に向け、キナナ書記長が全国行脚で開催していた大衆集会の場で実現したもので、この場で大衆を前に書記長は HMFS を地域住民の手に返すことを明言しました。彼のこの一言は、これまでなかなか重い腰を上げようとしなかった政府を今後動かす大きな力となっていくことになるでしょう。

設定した課題

(4) 旧 HMFS の森林減少に関わるデータ収集

キリマンジャロ山の森林破壊は地域の住民が招いたものであるとの政府の見解を正していく必要がある（少なくともそのすべてを地域住民に押しつけるのは誤り）。

そこで大規模に裸地化した旧 HMFS について、政府による商業伐採（ライセンス供与による民間企業の伐採も含む）のデータを収集を試みる（ただし過去州及び県森林局に対し行った調査では、それらのデータは残っておらず、今回も収集できない可能性は高い）。

【結果】

資料調査はキリマンジャロ州を含むタンザニア北部地域の森林を管轄するタンザニア・フォレスト・サービスモシ県事務所及びモシ県森林局にて実施しましたが、どちらにも過去の HMFS 内における政府運営の森林プランテーションに関するデータは残っていませんでした。

そこで州管轄の南部キリマンジャロ水源涵養森林局作成によるキリマンジャロ山の森林管理図を元に、当会にて、過去、現在における政府運営による森林プランテーションのロケーションを表した図を作成しました。

これによりプランテーションがある／あった HMFS となかったエリアの HMFS の現状における森林状況の比較ができるようになりました。またその結果は、プランテーションがあったエリアの HMFS の森林は、その他のエリアの HMFS との比較において著しく劣化していることを示しており、地域住民を森林破壊の元凶と位置づける政府の考えが誤りであることを裏付けるものとなりました。

２．小規模苗畑グループ支援

設定した課題

(1) キリマンジャロ東南部および東部山麓エリア

既存の 9 苗畑に対する運営支援および指導を継続し、このエリアを引き続きカバーしていくとともに、地域のイニシアティブによる森林の回復、保全活動を支えていく。

【結果】

2014 年度は計画通りキリマンジャロ山麓の 7 村（テマ村、キディア村、マヌ村、モヲ村、ルワ村、ロレ・マレラ村、ムシリ村）で 9 苗畑グループの運営支援及び指導を行いました（各グループの育苗計画と実績は以下の表 2 参照。また、育苗した苗木の植林、配布、販売実績は、前掲表 1 参照）。これらの苗畑グループには育苗ポット等の育苗資材、森林腐葉土、肥料代わりの牛糞、種子等の支給を行い、毎月巡回指導を実施しています。

2014 年度の苗畑グループ全体での植林実績は 23,549 本（14.74ha）でしたが、各村及びそれぞれの苗畑グループの当初の計画では、このうちの大部分を可能な限り国立公園に取り込まれた HMFS 内での植林用としていました。しかし結局 KINAPA からの植林許可がおりず、植林はすべて山麓の村落エリア内における裸地化した尾根で取り組まれました。

これまで基本的に各苗畑グループは独自に植林計画を立てていましたが、国立公園問題の発生以来、HMFS の地域管理を目指し、村との連携を進めてきていました。そして 2014 年度は既存 9 苗畑グループすべてが村との連携のもとに植林計画を立案しました。

実際の植林にあたっては村が植林場所、植林日を設定し、それを日曜礼拝等の場を利用して住民全体に伝え植林が取り組まれることになります。通常植林は 1 回で終わることはなく、その村で何日間にもわたって取り組まれます。そのため、たいていの村では住民を複数のグループに分けて植林計画を組んでいます。

今後苗畑グループは、村との連携強化を一層推し進め、拠点苗畑として地域での森林保全活動を支えていく存在となっていきます。苗畑グループの位置づけも質的に大きく転換しようとしています。

表2【小規模苗畑グループ育苗計画／実績】

単位：本

	グループ名	育苗計画	実　績
1	TEACA	21,220	19,666
		計画比	92.7%
2	Olimo 小学校	5,000	4,240
		計画比	84.8%
3	Fumvuhu 小学校	4,200	3,590
		計画比	85.5%
4	Kidia 女性グループ	3,110	2,248
		計画比	72.3%
5	Mowo 村人グループ	4,000	4,505
		計画比	112.6%
6	Manu 小学校	2,500	2,980
		計画比	119.2%
7	Maua セミナリー	4,200	2,300
		計画比	54.8%
8	Lole 小学校	4,000	3,850
		計画比	96.3%
9	Mshiri 中学校	5,160	2,779
		計画比	53.9%
合　計		53,390	46,158
		計画比	86.5%

村落エリアの植林地の一つ、マヌ村の裸地化した尾根。上は植林開始当初、下は現在の様子。尾根全体に森林を取り戻すためには、まだ何年もかかる。

設定した課題

(2) キリマンジャロ南西山麓エリア

キリマンジャロ南西山麓エリアとは、モシ地方県内の西端エリアを指す。このエリアはまだ苗畑がない空白地帯となっている。

そこでローカル NGO を通した苗畑運営支援を検討する。ただし KINAPA が国立公園内における環境保全活動を含む一切の取り組み阻止に出ている現状では、南西部エリアにおいて新たな苗畑の運営支援を開始することについては、TEACA と慎重に協議した上で、決定することとする。

【結果】

キリマンジャロ山南西山麓のキフニ・ジュー村を拠点に活動する環境 NGO・LEPAJE（前掲図１参照）及びンジャリ村を拠点に活動する Roots & Shoots（同）と、山麓での地域住民による植林活動支援のために、これまでで初となる育苗連携を実施しました（育苗規模各 5 千本）。

これは植林計画を共有し、お互いに育苗分担をするものです。育てられた苗木は 2015 年度に南山麓キボショ地区の HMFS に沿うように広がっている裸地を中心に、地域の住民たちによって植えられる予定です。

ただ KINAPA が HMFS 内での植林を認めない現状では、両 NGO を今から地域の拠点苗畑と位置づけていくことは、村側とも協議のうえ、見送ることにしました。当面は育苗能力を機動的に確保していくための連携という形で協力体制を維持していきます。

また 2014 年度は、キリマンジャロ東南山麓でも HMFS 植林に向けた育苗能力拡充のため、新規地域での育苗可能性調査と試験苗畑設置に取り組みました。これは国連開発計画（UNDP）からの支援を得て実施したもので、試験苗畑はキカララ村の青年グループ苗畑（育苗規模 4 千本）、キララチャ村の村苗畑（同 3 千本）、マルア村のバルタザールグループ苗畑（同 3 千本）、ムシリ村ナカラホテル苗畑（同 2 万本）の計 4 苗畑になります（いずれも植林は 2015 年度）。

これらの苗畑は従来の苗畑グループとは異なる運営方法を採用しており、苗畑資材等の支援の他に、育苗計画に沿って育てられた苗木を最終的に植林用に買い上げる「契約苗畑」の形態を取りました。

活動の自立

１．TEACAの自立

設定した課題

レンタルハウスの運営など、TEACA も自らの財政基盤の安定、強化に努めているが、自立にはまだほど遠い状況にある。2013 年度は州による NGO のサポートの術を探ったが、結局こちらも確たる財源を持たない州の限界が露呈し、行き詰まってしまった。

そこで 2014 年度は、国連等の国際機関、中央政府（副大統領府）ないしはロータリークラブ等の民間団体からの支援が得られないか、または連携が図れないかを検討し、これらの機関、団体等に対し具体的な提案を行うこととする。

【結果】

TEACA より国連開発計画（UNDP）に対し、植林・養蜂の連携プロジェクトで助成申請をし、これが認められ 2 年分計 16,845 ドルの支援が得られることになりました（本申請は TEACA からの直接申請であり、会計上は当会とは別）。

この支援により、植林では東南山麓での苗畑候補地調査及び最終的に 4 村での新規苗畑の立ち上げが実現し、また養蜂では計 100 箱の改良養蜂箱の配布を実施することができました。ただ今回の支援はあくまでも単発の事業支援であり、TEACA の長期的な自立という観点からの貢献度は低いと言わざるを得ません。

一方、ロータリークラブとの協力関係の構築にも取り組み、モシ県ロータリークラブの例会（写真）に 2 回出席、また年度末には日本のロータリークラブとも接点ができ、キリマンジャロ山での取り組み状況について会長、幹事の皆さんに説明を行いました。具体的な協力や支援の可否について、今後検討していただけることになりました。

２．グループ積み立て

設定した課題

(1) キディア女性グループ

すでに目標積立額を達成し、この資金を元手に自立のための新規事業（ハイブリッド種による養鶏事業）を立ち上げた同グループについては、TEACA のプログラムとしてのグループ積み立ては継続しない（自主的な積み立ての継続はグループの判断に任せる）。

当会はグループの養鶏事業の確実な運営に注力し、事業の採算ラインである 1 人 30 羽の飼育目標を目指すこととする。

新たな事業だけにまた課題や問題も多く出てくると思われ、グループの完全自立には 2 年程度はかかるものと見込んでいる。

【結果】

キディア女性グループの養鶏数は、全体では約 3 割増やすことができましたが、目標とする 1 人 30 羽の採算ラインは達成することは出来ませんでした（表 3）。これは多くのメンバーがニワトリを盗まれたことによるもので、村（キディア村）では他の村人たちも同様の被害に遭っており、もはや窃盗団の様相を呈しています。

養鶏事業は丁寧な指導とフォローをしていけば収益性も高く、メンバーの意気もまだ高いものの、窃盗に対する何らかの対策を打っていかないといずれやる気をくじいてしまうことになると危惧しています。養鶏事業で先行し大成功を収めているキランガ女性グループでは全員で犬を飼うことを決め、各自家で飼って窃盗の防止に成功しています。かといってキディア女性グループに犬を飼うことを強制することは出来ず、このニワトリ泥棒は頭の痛い問題となっています。

このほか同グループには 2 日間の養鶏セミナーを実施しました。

【表3】各グループ鶏飼育数推移

グループ名（人数）	飼育数 '14/8	飼育数 '15/3	増加数 (%)
キディア　(10)	105	134	29 羽
〈羽／人〉→	11	13	(28.9%)
キランガ　(6)	387	505	118 羽
〈羽／人〉→	65	101	(30.5%)

設定した課題

(2) キランガ女性グループ

2013 年度に会計簿の提出が滞った同グループについては、なによりその原因の究明を最優先する。100 万シリングの積み立て目標額の達成を目の前にしていただけに、何とかその立て直しを図りたいと考えている。ただしその状況、内容によっては、今後の他グループへのグループ積み立てプログラムの適用のことも考え、たとえ目標額を達成しても、新規事業の立ち上げを１年延期する等の処置が必要になるものと考えている。

【結果】

会計簿未提出の問題は調査の結果、積立金を管理している民間の貯蓄融資協同組合（SACCOs：Savings and credit cooperative societies）の側に問題があることが分かりました。積立金の出し入れと通帳が合わなくなっており、SACCOs 側（フケニ支部）は単純な計算ミスとしていますが、会計担当者に問題があると言わざるを得ません。支部全体での問題状況の把握には至っていないため、キランガ女性グループ、SACCOs、当会で話し合い、帳簿を修正させるとともに、SACCOs の会計担当者には間違いを招きやすい通帳の記入方法を改めるよう指示、またキランガ女性グループに対しては通帳に書かれた数字をそのまま信用せず、窓口でその都度自分たちで計算し直すように指導しました。

これにより同グループは 2014 年度に積み立て目標を達成し、この資金を元手とした収入向上のための新規事業として村での冠婚葬祭用のイスの貸し出し事業を始めました。事業は順調に推移しており、すでにグループに収入をもたらし始めています。

またグループによる養鶏事業も極めて順調に推移しており、メンバー 1 人当たり平均して牛 1 頭の飼育による牛乳販売並の純収益をもたらしています。養鶏は牛の飼育に比べると労働負荷を大幅に削減でき、飼料用の草刈り等、日々の重労働から解放されます。その結果さらに空いた時間の有効活用が図れるなど、女性にとってはとても魅力的な取り組みとなっています。ご主人からも一目置かれるようになり、女性の地位向上にも一役買っている側面があります。

３．養　蜂

設定した課題

(1)低地養蜂事業＜ミツバチ＞

現状の、さらには今後一層重大な局面を迎える国立公園問題での対応への負荷を考えると、遠隔事業地である低地養蜂事業についてはこれ以上適切な事業管理、運営の維持は厳しいと考えざるを得ない。従って本事業は撤退の方向で検討する。

【結果】

低地での養蜂事業は地元（カヘ区ンガシニ村）の養蜂グループに事業を移管し、予定通り撤収しました。

設定した課題

(2) 高地養蜂事業＜ミツバチ＞

ミツバチ養蜂については、今後中間技術を用いたケニア式トップバー・ビーハイブへの切り替えを順次進めていくこととする。

このため同養蜂箱の自己調達化を図るための製作技術の確立を目指すが、当面の間は、タンザニアの民間業者から調達する方向で検討し、調達可能であれば、2014 年度は２箱程度を追加調達することとする（ただし価格次第）。

【結果】

計画通り中間技術を用いた改良養蜂箱（ケニア式トップバー・ビーハイブ）2 箱を調達しました。ただし価格が高く、また遠方からの取り寄せが必要となる養蜂専門の民間業者を通すことはせず、地元モシの製材所に直接作製を依頼しました。

改良養蜂箱はクリアランスがシビアであり、いったん完成した養蜂箱も作り直しが必要となりました。地元で規格通りのものを調達できるようになるまでには、まだまだ製材所のスタッフに対する指導が必要で、また経験を重ねて貰う必要があります。

収穫は低地養蜂事業が終了したこと、高地養蜂は養蜂箱を入れ替えたことから、3 リットルに留まりました。

モシの製材所で改良養蜂箱用のトップバーを製作中

設定した課題

(3) 高地養蜂事業＜ハリナシバチ＞

ハリナシバチについては、引き続き新群の調達と、それによる飼育数の増加を目標としていく。新群の調達はほとんど運次第の状況であり、手に入るときに手に入る分だけ手に入れるという方法しか取りようがないのが実情である。

【結果】

ハリナシバチの新群調達は相変わらず困難な状況が続いており、2014 年度も調達することが出来ませんでした。またミツバチの来襲を受けていた養蜂箱は結局乗っ取られてしまい、年度初 8 箱だった営巣養蜂箱は一時 7 箱に減ってしまいました。しかし 2014 年度は既存養蜂箱からの分蜂を実施したことから、最終的に設置数は年度初に比べ 2 箱増え、計 10 箱となりました（すべての養蜂箱で営巣中）。

また 2014 年度の収量は 11 リットルで、コンスタントに 10 リットル以上を収穫し続けています。村での需要の高さも相変わらずで、収穫したハチミツはすべて地域の村人たちによって買われ、TEACA にはすでに在庫がない状態になっています。

ミツバチとハリナシバチを合わせた養蜂事業全体での TEACA の収入は年間約 25 万シリングとなっており、これは現地公務員の最低月給を上回るものです。私たち日本人の感覚でいうと 25 万円ほどになり、決して少ない額ではありません。ハリナシバチ養蜂はその中でも中核に位置するということがいえます。

設定した課題

(4) 養蜂事業の普及＜ミツバチ＞

2013 年度のマワンジェニ村に続き、2014 年度もキリマンジャロ山麓の村でのミツバチ養蜂の普及・拡大を図る。普及対象村はムウィカ地区のロレ・マレラ村とし、最も単純なプランクタイプ養蜂箱による展開をベースに考える。初年度は 2 箱程度を設置する予定。

【結果】

ミツバチ養蜂の普及については、UNDP からの資金助成を得られたことから当初より計画を拡大し、山麓の計 20 村に対し 100 箱の改良養蜂箱（ケニア式トップバー・ビーハイブ）及び養蜂道具の配布を実施しました。

この養蜂箱の配布は、養蜂が地域の森林保全活動の促進や維持等において以下に挙げる様々なメリットを持っていることから、植林事業との組み合わせで実施したものです。従って配布対象としたのは、それぞれの村の中で植林に取り組んでいる環境グループや女性グループ、青年グループ等であり、グループの活動の促進や地域での森林保全意識のさらなる向上、啓発を目的として実施しました。

〈養蜂の持つメリット〉

・収穫されたハチミツ
　→販売収入がグループの資金源となり、活動の持続性確保に貢献
　→メンバーの収入向に繋がる
　→栄養および健康の維持、改善に寄与できる
・森林を減少させること（伐採）による収入ではなく、増やすこと（植林）により収入に繋げていくことができる（収入代替）
・より豊かな森がより豊かで安定したハチミツの収穫（＝収入）へと繋がっていく
　→森林保全意識向上へのインセンティブ
・ミツバチによる農作物等への受粉効果

なお、配布した養蜂箱については数量が多かったことから地元での調達は出来ず、モシ県森林養蜂局の協力を得て、隣のアルーシャ州の業者から調達しました。

また当初年度内にこれらグループに対する養蜂研修を実施する予定でしたが、日程がタイトであったことから、2015 年度に実施することとなりました。

生活改善

1．改良カマド普及

設定した課題

2013 年度に採用した新方式による職人の養成を継続実施する。実施対象村はキレマ地区のルワ村を検討するが、TEACA の意見も取り入れた上で最終決定することとする。新方式による普及は今後も１年に１カ村のペースで続けることとする。

【結果】

新方式による職人養成を、計画していたルワ村にモヲ村を加えた 2 村で実施しました。養成研修はそれぞれの村で 6 日間ずつ実施され、もっとも廉価な普通石タイプ改良カマドの設置技術の習得を図りました。

この研修では、村が選んだ職人候補が TEACA のカマド普及技術者とともに、連続して 5 基のカマド製作に取り組みます。いわゆる OJT（On the Job Training）形式で技術者がつきっきりで指導し、続けて何基も作ることから、確実に設置技術を習得することが出来ます（以前は村人からの設置依頼が来てからその家に技術者と職人候補が出向き、1 基作っては次のオーダーを待ってまた設置をするという形で実施していましたが、技術者の負荷が高く、またスケジュールが立てづらいことから、普及対象村に泊まり込みでの連続設置方式に変えたものです）。

なお、今回職人を養成したルワ村には、以前養成した職人さんがおられたのですが、2014 年度に不慮の事故で亡くなってしまうという悲しい出来事がありました。とても残念で、また彼のご冥福を心からお祈り致します。

ルワ村に普及されたカマドをチェック中

２．コーヒー農家支援

設定した課題

⑴ 新品種接ぎ木研修

2013 年度に計画していたタンザニア・コーヒー研究所（TaCRI）専門家による 5 人のコンタクトファーマーに対する新品種の接ぎ木研修は、本人の都合が付かず、実施できなかった。接ぎ木技術は今後の新品種の普及に大きく影響してくるだけに、その技術習得は必須といえるものである。

そこで 2014 年度は、コーヒー協同組合（KNCU）の研修に 5 人を派遣することとし、また TEACA と協議の上、場合により TaCRI 専門家による研修と TEACA による研修を組み合わせて実施することとする。

【結果】

モシ近郊にある KNCU の直営苗畑で実施する接ぎ木研修（3 日間）に、当会が支援しているテマ村のコーヒー農家グループ KIWAKABO（Kikundi cha wakulima wa kahawa bora）のメンバー 10 名及び TEACA から 1 名を派遣しました。当初計画では受講者数を 5 名に設定していましたが、KIWAKABO からの強い要請があり、人数を倍増させたほか、TEACA の苗畑管理人の接ぎ木技術のさらなる向上を図るため彼もあわせて派遣し、計 11 名での研修となりました。

今回の研修をもって、KIWKABO の主要なリーダーに対する接ぎ木研修はあと数名を残し、ほぼ完了することが出来ました。今後は今回研修を受けたリーダーたちが中心となって、KIWAKABO のメンバーに接ぎ木技術を普及していくことが出来るようになります。

なお、同研修にて接ぎ木技術が十分に習得されたことが確認できたため、TaCRI 専門家及び TEACA による追加研修は実施しませんでした。

設定した課題

⑵ 巡回技術指導の継続

元コーヒー栽培普及指導員のジェームズ・キサンガ氏による、5 人のコンタクトファーマーを含む 10 人の KIWAKABO メンバーに対する巡回指導を継続実施する。

【結果】

2014 年度もキサンガ氏による KIWAKABO メンバー 10 名への巡回指導を継続実施しました。

KIWAKABO のメンバーもそれぞれ長くコーヒー栽培の経験を持っていますが、庇陰の度合いや選定の方法、タイミングなど、この巡回指導は大変役立っており、巡回先メンバーのコーヒー畑の状況も大きく改善が進んでいます。

設定した課題

⑶ KIWAKABO のデータ分析能力の向上

KIWAKABO が独立したコーヒー生産農家グループとして独自に販路を確保していくためには、絶対的な生産量もさることながら、データによる分析能力の向上により、適切な状況判断と問題点の把握、改善及び目標の設定ができるようになる必要がある。そこで当会にて基本的なデータ処理についての指導を実施する。

一方、KIWAKABO から要請されている、メンバーからのコーヒー買い付け用の初期回転資金の支援については、2014 年度は見送る方針。

【結果】

データ管理においてはとくに各メンバーの過去からの収穫量推移を一覧化し、メンバー毎に収穫レベルでの個別の問題把握を出来るようにしました。またこれにより、KNCU にコーヒーが流れてしまうことをなるべく防ぎたいと考えています。

回転資金については、計画では実施しない方針としていましたが、TEACA は集荷能力を向上させないと KIWAKABO の自立への道筋が立てられないとして、自己資金より回転資金支援（融資）を実施しました。しかし当会が実施した KIWAKABO への会計監査において、回転資金の用途外への流用が確認されるところとなりました。KIWAKABO に対しては会員総会を開催し、事実関係を全メンバーに明らかにした上で、融資の返却および販売後のコーヒー売り上げからの各メンバーへの支払いをどうするかを協議、決定するよう指示しました。現地の会計年度が 6 月が年度末となるため、本件の最終決着は日本の 2015 年度となる見通しです。

３．その他

設定した課題

(1) 診療所支援

テマ村の新診療所については村側の着工を待つしかなく、着工を待ってその翌年度に予算化することとする。

【結果】

2014 年度は予算を組みませんでしたが、ずれ込んでいたテマ村での新診療所の建設にようやく県からの承認がおり、2015 年度から着工の見通しとなりました。

設定した課題

(2) 伝統水路支援

キディア伝統水路の伝統溜め池“Nduwa”は以前より水量確保のための拡張の要望が出されており、キディア村との話し合いにより、必要と判断される場合は、支援を実施する。

【結果】

同水路については調査の結果、Nduwa の補強より流路上での漏水対策の方が優先度が高いことが確認されました。2014 年度は予算を組んでいなかったことから、2015 年度に対策することとしました。

研修／セミナー等

１．子どもたちのスタディツアー

設定した課題

キリマンジャロ山麓にある小学校 1 校を対象に実施している「自分たちの伝統、文化」をテーマにしたスタディツアーを、2014 年度も継続実施する。対象校及び対象学年は、TEACA 及び学校の先生方と協議のうえ決定する。なお、スタディツアーの実施先（マラングー）およびその方法については、見直す可能性がある。

【結果】

キルア・ブンジョー地区のマヌ小学校の 5 年生を対象として、マラングーにあるチャガ民族博物館へのスタディツアーを実施しました。同校はこれで 3 年連続での実施となります。

なお、これまで訪ねていた地下トンネルについては、メンテナンスの状況が良くないことから、今回は訪問を見送りました。

２．ケニアでの養蜂研修

設定した課題

ミツバチ養蜂の中間技術については、その確実な習得に向けて、ケニアのバラカ農業大学が実施する研修に毎年 TEACA リーダーを派遣することが望まれる。

ただし国立公園問題への対応から、この研修への参加は負荷が高く、2014 年度も実施するかについては TEACA と協議の上、決定することとする。

【結果】

2014 年度は日程的に無理があると判断されたため、実施を見送りました。

３．日本人長期ボランティアの受け入れ

設定した課題

現在当会に対し、TEACA の活動現場で 1 年間程度の長期ボランティアに取り組みたいとの要望が出されている。大学（持続可能開発専攻）を休学し、現在ナミビアで遊牧民の生活について学んでいる女性であるが、TEACA とも話し合い、基本的に受け入れる方針。実際に長期ボランティアにするかは、夏の現地調査時に本人と会い、最終決定する予定である。

【結果】

長期でのボランティア受け入れは最終的に見送りましたが、7 ～ 9 月の約 2 ヶ月間、日本人としては初となる TEACA でのボランティア受け入れを実施しました。現地では Rafiki プロジェクトを中心にプロジェクトの手伝い及びフォローにあたっていただき、特に「自慢の森」の名前の最終決定段階では、一人で切り盛りするなど、大変活躍し、また助けていただきました。

2014年度　事業報告　＜国内事業＞

１．日本の市民とタンザニアの村人の取り組み Rafikiプロジェクト

これまで Rafiki プロジェクトでは、劣化が進むキリマンジャロ山の森林の中にあって、地域住民の長年の努力によりその健全性が保たれた希有な森としてテマ村の森を取り上げ、その森を守ろうという村人たちの内発的意思を側面から支えていく活動に取り組んできました。またそのために、彼らが守ってきた森の自慢を集めたツール（ガイドブック、カルタ、イラストマップ）の作製に取り組んできました。

2014 年度はその内発性を支える原動力としてさらに“ムーブメント”をキーワードとした視点を加えた活動に取り組みました。その一つが自分たちの自慢の森への名付けになります。

2014 年度も 7 月 21 日～ 8 月 8 日にかけての 19 日間の日程で、Rafiki プロジェクトより 2 名がタンザニアに赴き、現地でプロジェクトの推進にあたりました。派遣日程及び 2014 年度の設定課題、取り組み結果は以下の通りです。

表4 【Rafikiプロジェクト現地渡航日程】

	行　程	内　　容	宿泊
1	日本発	成田発	―
2	ﾀﾝｻﾞﾆｱ着	TEACA とﾐｰﾃｨﾝｸﾞ	ﾓｼ泊
3	ﾓｼ→ﾃﾏ村	TEACA とﾐｰﾃｨﾝｸﾞ	ﾃﾏ村
4	ﾃ ﾏ 村	ﾃﾏ村ｷｰﾊﾟｰｿﾝ･ﾐｰﾃｨﾝｸﾞ ①	↓
5	↓	ｷﾃﾞｨｱ村ｷｰﾊﾟｰｿﾝﾐｰﾃｨﾝｸﾞ ①	↓
6	↓	ﾓﾖ村ｷｰﾊﾟｰｿﾝ･ﾐｰﾃｨﾝｸﾞ ①	↓
7	↓	9 教会ｱﾝｹｰﾄ調査実施 ｶﾞｲﾄﾞﾌﾞｯｸ委員会ﾐｰﾃｨﾝｸﾞ	↓
8	↓	ﾐｰﾃｨﾝｸ及び資料作成	↓
9	↓	ﾃﾏ村ｷｰﾊﾟｰｿﾝ･ﾐｰﾃｨﾝｸﾞ ②	↓
10	↓	ｷﾃﾞｨｱ村ｷｰﾊﾟｰｿﾝﾐｰﾃｨﾝｸﾞ ②	↓
11	↓	ﾓﾖ村ｷｰﾊﾟｰｿﾝ･ﾐｰﾃｨﾝｸﾞ ②	↓
12	↓	ｵﾘﾓ小学校ｶﾙﾀ･ﾐｰﾃｨﾝｸﾞ	↓
13	↓	ﾐｰﾃｨﾝｸ及び資料作成	↓
14	↓	教会ｱﾝｹｰﾄ回収	↓
15	↓	ﾌﾝﾌﾞﾌ小学校ｶﾙﾀ･ﾐｰﾃｨﾝｸﾞ ﾓﾖ小学校ｶﾙﾀ実演	↓
16	↓	ﾌｫｲｪﾆ小学校ｶﾙﾀ実演 ﾅﾃｨﾛ中環境ｸﾗﾌﾞとﾐｰﾃｨﾝｸ	↓
18	ﾀﾝｻﾞﾆｱ発	TEACA とﾐｰﾃｨﾝｸﾞ	↓
19	日本着	成田着	―

設定した課題

(1) 自慢の森への「名付け」

テマ村及びそれに隣接するキディア村、モヲ村の 3 村において、多くの村人の参加の下に、3 村で共有する森の名前を決定する。またそのためのプロセスを確定する。

【結果】

キリマンジャロ山麓にあるテマ、キディア、モヲの 3 つ村の村人たちが長く守ってきた彼らの自慢の森への名付けでは、村人たちとのミーティングを計 6 日間にわたって開催し、その中で、守られている森の実態への認識の共有、森の名付けの是非の討論、名前決定プロセスの策定を行いました。最終的に 3 村の 9 カ所の教会で村人たちによる投票が実施され、彼らの森に「エデン」という名前を付けることが決定されました。

投票では村人たちは大変盛り上がり、谷を挟んだ隣の尾根までその声が聞こえたとの報告が入ったほどです。キリマンジャロ山の特定エリアの森に名前がつく、しかもその名前をそこに暮らす住民自身が決めるということはもちろん初めてのことで、彼らが誇りに思う森をこの名前をきっかけにますます誇りに思い、これからも大切に守っていきたいという気持ちに繋げていってもらえたらと考えています。

教会での投票に備え、３村から出された森の名前候補が貼られた投票用の袋

設定した課題

(2) ツール掲載アイテムを多くの村人の意見により決定する

現行のツール（ガイドブック／カルタ／イラストマップ）に掲載されいているアイテムは、まだ一部の村人に対する聞き取り調査による結果しか反映できていないことから、必ずしも多くの村人たちの考えと一致しているとはいえない側面がある。そのためこれらのツールに掲載するアイテムを 3 村の多くの村人たちの意見により決定されたものとする。

【結果】

3 村の多くの村人たちによって共有されている「森の自慢」が何であるのかを調べるために、3 村の 9 教会で村人たちへのアンケート調査を実施しました。調査対象としたカテゴリーは、植物／動物／昆虫／人物／人工物・遺構／森の利用方法・森に関わる知恵／慣習・言い伝え／各氏族と森に関わるもの／その他の 9 項目。

2010 年の第 1 回調査以来、Rafiki プロジェクトがこれまでの 8 回の現地調査で積み上げてきたデータ及び今回のアンケート調査によって、森の自慢に関するデータの収集はほぼ完了したといえます。

今後はこれらのデータを使って、いよいよ森の自慢をまとめた各ツールの最終版作製へと着手していくことになります。

設定した課題

(3) 村人との協力体制をより強化、持続的なものとする

Rafiki プロジェクトが最終的に目指しているものは、村人たちの内発的気持ちが、長く自分たちの森を大切に守っているその状態であり、日本人がコミットすることにはない。

従って Rafiki プロジェクトではこの取り組みが movement として地域において“自分化”され“内包化”されていくことを常に重視して取り組んでいる。

2014 年度は、ガイドブックを契機に立ち上げられた村の編集委員会がその原動力の一つになると考えており、委員会との継続的な協力関係の構築を目指す。

【結果】

ガイドブック委員会には、これまで収集した森自慢のデータの精査作業にあたっていただき、その作業を完了していました。そして委員会との話し合いの結果、今後も Rafiki プロジェクトとの連携を継続していく方針が確認されました。

2014 年度は、教会アンケートの結果を自慢の森の各ツール（最終版）に反映させていくため、質問カテゴリー毎の内容の精査及び自慢の優先度判断で協力してくれることになりました。ただしその作業過程において、テマ村の出身者で構成されている編集委員会には、他村に関わる部分では正確な判断をつけられない問題があることが分かり、これらの作業を年度内に完了することは出来ませんでした。

当初テマ村とその森をベースに活動が立ち上がってきた Rafiki プロジェクトは、その後これに隣接するキディア、モヲを加えた３村（更に現在では人口増による村の分割により、リャコンビラ村を加えた 4 村）の連携による取り組みへと活動が進化しています。今後は各村の合同委員会等の視点も組み入れた取り組みが必要となってくるかも知れません。

キディア村でのミーティングの模様

モヲ小学校に初めて森の自慢カルタを紹介